

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02435

研究課題名(和文)「近衛基熙詠草」に関する総合的基礎研究

研究課題名(英文) A Comprehensive and Fundamental Study of Manuscripts of Waka Poems Composed by Konoe Motohiro

研究代表者

川崎 佐知子 (Kawasaki, Sachiko)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：00536120

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、公益財団法人陽明文庫が所蔵する「近衛基熙詠草」(目録上の合計点数1,332点)を研究対象とした。はじめに、「近衛基熙詠草」の書誌を調査し、整理を進め、研究資料として活用できるような環境を整えた。つぎに、「近衛基熙詠草」からうかがい知ることができる近衛基熙の和歌活動を、近世前期の堂上歌壇に位置づけた。さらに、近衛基熙とその背後にひかえる近世前期の近衛家が日本文化で果たした役割を考えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究における研究成果の学術的意義の第一は、これまで未整理であった「近衛基熙詠草」が、近衛基熙自筆の詠草(歌稿)だけでなく、家集や歌集稿、書状などで構成される資料群であると判明したことである。第二は、「近衛基熙詠草」から近衛基熙の家集『応円満院殿御詠歌』を見いだしたことである。これにより、個々の詠草を詳細に分類するための明確な基準を確立できた。第三に、家集編纂の状況などから、近衛基熙が、薨後、和歌の龜鑑として崇拜されていたことがわかったことである。

研究成果の概要(英文)：The subject of this study is "manuscripts of waka poems composed by Konoe Motohiro", that is held by Yomei-Bunko Foundation. Konoe Motohiro was the 20th head of Konoe Clan. He was an noble poet during the Edo period. The first stage is to research and study bibliographic materials. It is for building a new data-base. The next is to difine his remarkabie achievements in waka circles. Konoe Motohiro was an able pupil of Retired Emperor Gosai. The last is to show that Konoe Motohiro was an important poet. His descendants respected him as a model of waka composer. It is no exaggeration to say that he and his clan contributed much to Japanese culture tradition.

研究分野：日本文学

キーワード：近衛基熙 陽明文庫 堂上歌壇 後水尾院 後西院 霊元院 詠草 和歌

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)国内外の研究動向及び位置づけ

近世の歌壇史研究は、全体の流れがおおむね見通せる状況にある。とくに、近世前期の堂上歌壇史については、つぎに掲げた研究により、「後水尾院歌壇から霊元院歌壇へ」という方向性がほぼ決定づけられた。

鈴木健一氏『近世堂上歌壇の研究(増訂版)』(汲古書院 2009年)

上野洋三氏『元禄和歌史の基礎構築』(岩波書店 2003年)

いっぽうで、歌壇を構成する個々の歌人の活動は、未だ十分に検討されたとはいえない。田中隆裕氏「後西院の和歌・連歌活動について」(『和歌文学研究』53号 1986年10月)が提示した「後水尾院 後西院 近衛基熙」の一流は、「後水尾院の和歌を批判的に継承した霊元院」とはべつの道筋が、たしかに存在したことを思わせ、示唆に富む。後水尾院・霊元院両歌壇の周辺に点在する数多くの堂上歌人の活動を考慮する必要がある。

(2)本研究の着想に至った経緯

研究代表者は、科学研究費基盤研究(C)2014年採択研究課題「『无上法院殿御日記』に関する総合的研究」(研究代表者 川崎佐知子・研究課題番号 26370218)において、近衛基熙室である後水尾院品宮常子内親王の日記『无上法院殿御日記』を研究した。課題遂行の過程で、『无上法院殿御日記』には、近衛家第二十代の近衛基熙(一六四八 一七二二)の和歌活動が、後水尾院(一五九六 一六八〇)・後西院(一六三七 一六八五)・霊元院(一六五四 一七三二)との関わりから、少なからず描かれていることに気がついた。

これとはべつに、公益財団法人陽明文庫(京都市右京区)での資料調査で、未整理の「近衛基熙詠草」(目録上の合計点数 1,332点)を知り得た。試みに、近衛基熙の日記『基熙公記』などと照合してみると、「近衛基熙詠草」には、近衛基熙が関係した後水尾院・後西院・霊元院の御会の際の詠草(歌稿)が多数含まれると判明した。そこで、「近衛基熙詠草」をもとに、近世前期の堂上歌人、近衛基熙の活動を考察することにした。

2. 研究の目的

(1)研究対象及び研究目的

本研究は、「近衛基熙詠草」(公益財団法人陽明文庫所蔵)を主たる研究対象とし、つぎの三点を目的とする。

「近衛基熙詠草」の書誌調査を進め、研究資料として活用できるような環境を整える。

「近衛基熙詠草」に窺える近衛基熙の和歌活動を、近世前期堂上歌壇に位置づける。

近衛基熙の五摂家筆頭当主という特別な立場と、古典籍の保全と継承に纏わる書写活動に留意し、近衛基熙、および近世前期の近衛家が、日本文化で果たした役割を明確にする。

(2)本研究が目指した研究的展開

研究代表者には、近衛家の蔵書や近衛基熙の『源氏物語』注釈についての研究の蓄積がある。

川崎佐知子「近衛基熙の書物交流」(『和歌文学研究』96号 2008年6月)

川崎佐知子「近世前期源氏学の展開 『一簣抄』の注釈史的位置」(『中古文学』85号 2010年6月)

以上の研究成果も活用しつつ、「近衛基熙詠草」を詳細に検討し、近衛基熙の和歌活動を具現化しようと考えた。とくに、近衛基熙が和歌の指導を受けた後水尾院・照高院宮道晃親王・後西院との関係、霊元院とその歌壇の構成員との関わりかたに留意し、近衛基熙という堂上歌人の功績を明らかにする。従来近世前期堂上歌壇史とは異なるあらたな歌壇史の構築を目指した。

3. 研究の方法

(1)重点研究テーマの設定

2-(1)に掲げた三つの研究目的を着実に達成するため、下記の通り、各年度の重点研究テーマを設定した。

平成29年度 「近衛基熙詠草」と近衛基熙に関する基礎的資料報告」

平成30年度 「近世前期堂上歌壇と近衛基熙の和歌活動に関する資料報告と文学的価値」

平成31年(令和元年)度 「近世前期近衛家当主の和歌活動に関する総合的考察」

上記の各テーマを着実に遂行するため、つぎの手順をとった。

原本資料の実見調査・情報収集

資料内容の分析・検討

研究成果の公表

(2)各年度の研究方法

[平成29年度]

平成29年度は、「近衛基熙詠草」に関する基礎的資料報告」を重点研究テーマとし、考察対象である陽明文庫蔵「近衛基熙詠草」について、以下の作業をおこなった。

実見調査と情報収集

陽明文庫(京都市右京区)において、「近衛基熙詠草」1,332点の実見調査を実施した。調査内容は、原本の書誌情報と内容確認、および資料判読であった。また、関連資料を収集するため、東京大学史料編纂所(東京都文京区)、天理大学附属天理図書館(奈良県天理市)などでの調査をおこなった。内容は、『後水尾院御日次記』『京都御所東山御文庫記録』『滋野井公澄日記』ほかの判読であった。

このほか、最新の研究動向を探るため、中古文学会(年二回、2017年5月東京、2017年10月静岡)・中世文学会(年二回、2017年5月東京、2017年11月和歌山)・和歌文学会(年一回、2017年10月宮崎)などに参加した。

資料内容の分析・検討

実見調査と情報収集の結果をふまえ、調査実施後、すみやかに、「近衛基熙詠草」の内容の検討にはいった。あわせて、近衛基熙の和歌に関する事績を、『基熙公記』『无上法院殿御日記』などにに基づき、整理する作業に着手した。

研究成果の公表

- ・ の作業を重ねて得られた成果を、学術論文として公表した。

〔平成30年度〕

平成30年度は「近世前期堂上歌壇と近衛基熙の和歌活動に関する資料報告と文学的価値」を重点研究テーマに、以下の作業をおこなった。

実見調査と情報収集

平成29年度につづき、陽明文庫(京都市右京区)において、「近衛基熙詠草」1,332点の実見調査を実施し、原本の書誌情報と資料内容の確認・資料判読の精度を高めた。また、関連資料収集のための調査を、東京大学史料編纂所(東京都文京区)、天理大学附属天理図書館(奈良県天理市)などにておこなった。内容は、『京都御所東山御文庫記録』『滋野井公澄日記』などの資料判読であった。

上記のほか、最新の研究動向を探るため、中古文学会(年二回、2018年5月東京、2018年10月岡山)・和歌文学会(年一回、2018年10月東京)などに参加した。

資料内容の分析・検討

前年度の成果に、あらたに実見調査と情報収集で確認した事項を加え、『基熙公記』および近衛基熙の和歌を、後代の近衛基前が編纂した『近衛基熙公御詠歌』などに照らしながら、考察を進める。諸機関の他資料も対照し、資料の背後にある文化的な環境を考察した。

研究成果の公表

- ・ の作業を重ねて得られた成果を、学会で口頭発表した。また、学術論文を公表した。

〔平成31年(令和元年)度〕

平成31年(令和元年)度は「近世前期近衛家当主の和歌活動に関する総合的考察」を重点研究テーマに、以下の作業をおこなった。

実見調査と情報収集

前年度までの研究を近世前期堂上歌壇に位置づけるため、近衛基熙の和歌活動を裏付ける資料(消息・日記など)の実見調査を、陽明文庫(京都市右京区)で実施した。また、関連資料の収集を、東京大学史料編纂所(東京都文京区)、宮内庁書陵部(東京都千代田区)、天理大学附属天理図書館(奈良県天理市)などでおこなった。内容は、『京都御所東山御文庫記録』『兼輝公記』『一簣抄』『滋野井公澄日記』などの資料判読であった。

上記のほか、最新の研究動向を探るため、中古文学会(年二回、2019年5月東京、2019年10月兵庫)・和歌文学会(年一回、2019年10月奈良)などに参加した。

資料内容の分析・検討

実見調査であらたに得られた情報をもとに、調査実施後、すみやかに整理し、前年度までの研究成果に照らし合わせながら、詳細な分析と検討をおこなった。

研究成果の公表

前年度までの調査内容の補正を経た最終年度の報告の一環として、学会で口頭発表した。また、学術論文を公表した。

4. 研究成果

(1)平成29年度の研究成果

研究の主な成果

重点研究テーマ「近衛基熙詠草」に関する基礎的資料報告に沿って、陽明文庫蔵「近衛基熙詠草」の書誌を精査し、初年度以降の研究を確実に遂行するために必要な基礎データの集積に努めた。並行して、近世前期歌壇の状況、とくに近衛基熙と関係が深い後西院の御会のあり方を把握する作業をおこなった。成果を、川崎佐知子「立命館大学図書館西園寺文庫蔵『新院御会部類集』の解題と翻刻」(『立命館文学』第654号、2017年10月)にまとめた。天和年間における後西院御会の開催状況と構成要員を洗い出し、近世前期の堂上歌壇の一樣相を照射した。同時に、近衛基熙が、主催の後西院に次いで重んじられたことを確認した。

得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

近世は、勅撰和歌集がない時代である。平安時代より室町前期まで、およそ五百年にわたって、

形成されてきた日本文学史の骨格を、江戸時代は継承していない。ここに、近世和歌の実態を把握し難いものにするひとつの要因がある。近世和歌を象徴するものは何か、どのような和歌が模範とされるのか、後水尾院や霊元院のほかに、どのような堂上歌人が、どの程度の規模で存在したのか。膨大な数量の堂上和歌資料を整理する準備として、ある程度の予測を立てておく必要がある。本研究の課題を円滑に遂行するために、まずは、後西院の御会に注目した。

立命館大学図書館西園寺文庫蔵『新院御会部類集』は、天和二年（一六八二）より同三年までの二年間に催された後西院の和歌御会の記録である。所蔵機関の許諾を得て、同資料の解題と全文翻刻を公表できたことは、大変な成果であった。立命館大学の創始には西園寺公望が関わり、大学創立の基盤とすべく西園寺公望より寄贈された図書が、立命館大学図書館西園寺文庫の中核であることはよく知られている。この知識を以て、『新院御会部類集』を見ると、同資料の巻頭に捺された西園寺実輔（一六六一—一六八五）の蔵書印に、じつに重大な意味があることに気づく。西園寺実輔は、後西院や近衛基熙と同時代の公家、西園寺家の当主で、五撰家の鷹司家出身である。その蔵書であるために、筆写者は不明ながら、御会が開催された時期と近いころに写された可能性がきわめて高い。まさしく近世前期の堂上歌壇を考察するためにあるような新資料を発見できたのだ。

田中隆裕氏「後西院の和歌・連歌活動について」（『和歌文学研究』53号 1986年10月）は、後西院の和歌活動がおおまかに三つの時期に分類できると説いた。『新院御会部類集』は、第三期の前半にあてはまる。古参の中院通茂、高野保春、平松時量、風早実種、櫛笥隆慶らに比べ、若い世代の近衛基熙だが、御会では、主催者後西院の次に位置づけられることも判明した。

以上のとおり、研究初年度は、「近衛基熙詠草」の整理に不可欠な基本的情報をひとつひとつ収集し、以降の研究基盤を整えることができた。

(2)平成30年度の研究成果

研究の主な成果

重点研究テーマ「近世前期堂上歌壇と近衛基熙の和歌活動に関する資料報告と文学的価値」に基づき、前年度に引き続き、陽明文庫蔵「近衛基熙詠草」の書誌調査を進めた。調査の過程で、詠草を集成した歌集稿や歌集の体裁をとる資料を見いだした。これらを基準に詠草を整理することで、基熙の和歌活動の把握がより容易になると判断した。並行して、『基熙公記』などの記録類にみえる和歌活動に関する記事を抜粋し、整理した。成果として、川崎佐知子「『応円満院殿御詠歌』について」（2018年度和歌文学会五月例会、2018年5月19日、於中央大学多摩キャンパス〔東京都八王子市〕、単独口頭発表）を公表した。陽明文庫蔵『応円満院殿御詠歌』を取り上げ、書誌調査から、同書が近衛家第二十五代基前により編纂された近衛基熙の類題和歌集であること、収載歌は二千余首におよぶことなどを指摘した。また、収載歌と「近衛基熙詠草」を比較し、『応円満院殿御詠歌』が「近衛基熙詠草」をもとに作られたことにも言及した。『応円満院殿御詠歌』が、「近衛基熙詠草」を整理していくうえで基準資料となり得ると結論した。川崎佐知子「『応円満院御詠』について」（2018年度和歌文学会関西十二月例会、2018年12月1日、於大阪大学豊中キャンパス〔大阪府豊中市〕、単独口頭発表）では、陽明文庫蔵『応円満院御詠』が、近衛家第二十二代、家久（一六九七—一七三七）によって編纂された近衛基熙の家集であることを述べた。以上のほか、川崎佐知子「『狭衣物語』の注釈書」（『狭衣物語の新世界』武蔵野書院、2019年2月）、川崎佐知子「立命館大学図書館蔵『後水尾院御集』について」（『朱』62輯、2019年3月）、川崎佐知子「立命館大学図書館蔵『後水尾院御集』の翻刻と解題」（『立命館文学』第662号、2019年3月）を公表した。

得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

私家集とは、個人の歌集である。勅撰集や私撰集などが、多数の歌人の和歌を集成した総合的な撰集であるのに対し、原則、一個人の和歌を集めたものが私家集である。「歌集」ではなく、「家集」であるのは、個人の背後に横たわる家門が意識されているためであろう。その成立の事情や目的は多様で、作者本人が編纂した自撰集、他人による他撰集、勅撰集などの撰集資料とするために編まれたものもあれば、詠作の年次・日次の順に並べられたものもある。ほとんどは編纂された結果を知り得るのみであり、成立に至った過程は憶測するほかないのがふつうである。

『応円満院殿御詠歌』は、近衛基熙（号、応円満院）の和歌を集めたものである。奥書に、近衛基熙の子孫、近衛家第二十五代の近衛基前（一七八三—一八二〇）が編纂したとあるため、他撰集である。全二冊で、第一冊は春夏秋冬の四季の、第二冊は恋と雑の、それぞれ題により部類されている。「近衛基熙詠草」のうち『応円満院殿御詠歌』を発見したことは、本研究課題遂行過程での最も大きな収穫のひとつであると考えられる。近世の堂上公家の家集があまり多くは報告されていない現状にもかかわらず、近衛基熙にはそれがあった。『応円満院殿御詠歌』の存在自体が、歌人近衛基熙に対する評価を示すと考えられるのである。くわえて、近衛基前が家集を編纂する途上で詠草を部類するために作成した資料（資料番号 60947 60948 60949 60950 60951 60952）も見いだした。近衛基熙が遺した詠草をもとに、近衛基前は二千首あまりを選定し、題により分類し、配列を決定した。これまでは推し量ることしかできなかった私家集の選定過程を、具体的な作業まで明確にすることに成功した。

研究の二年目として、「近衛基熙詠草」の調査を通して発見した重要資料を報告できた。また、それらを応用し、近衛基熙の歌人としての活動と評価を示すことができた。

(3)平成 31 年（令和元年）度の研究成果

研究の主な成果

重点研究テーマ「近世前期近衛家当主の和歌活動に関する総合的考察」に沿って、前年度までの研究成果を基礎にした考察をおこなった。その結果、「近衛基熙詠草」の歌集稿や歌集が、近衛基熙の薨後にも編まれている事実気づいた。それらは、近世前期の近衛基熙の和歌が後世より規範として仰がれていた証跡にあたると結論した。成果は、川崎佐知子「陽明文庫蔵『御哥』について」(和歌文学会関西七月例会(第130回)、2019年7月6日、相愛大学・南港学舎〔大阪市住之江区〕)で口頭発表し、川崎佐知子「陽明文庫蔵『御哥』について」(『立命館文学』第664号、2019年12月)に成稿した。「近衛基熙詠草」のうちの『御哥』は、近衛基熙の和歌を集めたものである。『御哥』は、各和歌の前に、比較的長い詞書を備える。これらは、近衛基熙自筆の詠草ではなく、編纂者が独自に付したものと思われる。その言葉遣い・用語の特徴などから、編纂者を、近衛基熙の上臈、侍従御方(久我通名女、一六七九 一七四八)と推定した。そのほか、川崎佐知子「立命館大学図書館蔵『一順再返』について」(『論究日本文学』第110号、2019年5月)、川崎佐知子「立命館大学図書館蔵『詠二十首和歌』について」(『平安文学研究 衣笠編』第8輯、2019年10月)などを公表した。

得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

近世前期堂上和歌の研究において、女性の関わりに言及した論は未だ見いだせない。第一〇八代後水尾院のつぎは、江戸時代初の女性天皇、明正院(一六二三 一六九六)である。寛永六年(一六二九)十一月、七歳で受禅してのち、同九年正月十七日に、初度の禁中和歌御会始が開催されたが、「御製無し(原漢文)」という。同十五年正月十九日の和歌御会始にも、「当代〔明正院〕未だ御製を出されざると云々(原漢文)」とある(『続史愚抄』〔黑板勝美『新訂増補国史大系』第十五巻 吉川弘文館 二〇〇〇年新装版第一刷〕)。主催者であるにもかかわらず、御会始での女性天皇が出詠した様子うかがわれない。そもそも、公家の女性歌人が存在したのか否かさえも、よくわからないのが実情である。

『御哥』の検討により、近世前期の公家の女性も家集の編纂に携わる場合のあることが判明した。これも、本研究課題を遂行するなかでの重大な発見であった。歌人が詠出した和歌ばかりが、和歌活動なのではない。編纂時の代表的歌人を網羅する勅撰和歌集が存在しない近世だからこそ、発想を転換し、家集や歌会との関わりかたにも目配りしなければならないことを知り得た。

研究の最終年度として、前年度までの成果を踏まえ、近衛家基熙の和歌活動が、後世にも少なからぬ影響を及ぼしていたことを、最も信頼できる陽明文庫所蔵の一次資料・自筆資料などによって、総合的に検証することができた。

(4)研究期間全体の成果と今後の展望

研究期間全体を通じて、研究開始時に計画した三段階の重点研究テーマを、各年度で解決しながら、確実に成果を積み重ね、当初設定した三点の目標を、おおむね達成することができた。

「近衛基熙詠草」は、近衛基熙自筆の詠草が大部分を占める。同様の資料に、近衛家第二十一代の近衛家熙(一六六七 一七三六)の詠草がある。緑川明恵氏『近衛家熙公御詠草 翻刻と研究』(古典ライブラリー 2018年)は、近衛家熙の詠草を対象とした研究である。本研究課題の遂行においても、多大なる学恩を蒙った。さて、比較対照のために記すならば、近衛家熙の詠草は、年次が明らかなもので、延宝四年(一六七六)の家熙十歳から正徳元年(一七一一)の四十五歳まで、和歌は一千百余首という。いっぽう、父の近衛基熙は、承応四年(一六六五)の八歳から享保四年(一七一九)の七十二歳までである。和歌は、精選された『応円満院殿御詠歌』だけでも、二千首以上にのぼる。詠歌の年数においても、歌数においても、近衛基熙は、近衛家熙を圧倒している。何より、近衛基熙については、他撰による家集が編まれている。近衛家熙にはそれが無い。近衛家歴代を見渡しても、家集が伝わるのは近衛基熙のみである。このことから、近世の近衛関白家における和歌の規範は、近衛基熙であったといってもいいのではないか。「近衛基熙詠草」の一点一点を調査し、各資料を分析することを通して近衛基熙の和歌活動を明示し、これまでは不分明だった、歌人としての近衛基熙の評価を浮かび上がらせることができた。

近世前期の朝廷では、天皇や院による御会が、定期的に催される傾向にあった。そのため、堂上公家は、公的な立場で和歌を詠む機会を多く有した。近衛基熙の場合も例外ではない。生涯の大部分を廷臣として過ごしているだけに、参会した御会も多彩に富んでいる。近衛基熙の和歌活動をもとに、新しい近世前期の御会年表を、できるだけ早期にまとめる所存である。その際、霊元院との関係を、あらためて考察する必要がある。久保貴子氏『近世の朝廷運営 朝暮関係の展開』(岩田書院 1998年)は、朝廷運営の観点から、霊元院と近衛基熙とを対立的に捉えた。久保氏の見解に対する反論はない。問題は、朝廷運営に限るはずの両者の関係を、和歌における両者の関係にも当てはめようとする向きが見てとれることである。たしかに、霊元院が譲位し、和歌活動を本格化させる元禄期は、近衛基熙の関白就任の時期にほぼ重なる。だからといって、政治上の関係と和歌のそれとを、ただちに等しいと断ずることは、決してできないはずである。和歌における両者の関係は、和歌によってこそ捉えるべきであろうと考える。

今後の展望として、「近衛基熙詠草」が、できるだけ多くの研究に活用されるような環境を、早急に整えるよう努める所存である。本研究により、研究資料として公開する下準備を完了することができた。引き続き、定められた方法を遵守しながら、関係諸機関と交渉し、慎重に、手続を進めていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 川崎佐知子	4. 巻 664
2. 論文標題 陽明文庫蔵『御哥』について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 490-502
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川崎佐知子	4. 巻 8
2. 論文標題 立命館大学図書館蔵『詠二十首和歌』について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 平安文学研究 衣笠編	6. 最初と最後の頁 20-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 川崎佐知子	4. 巻 110
2. 論文標題 立命館大学図書館蔵『一順再返』について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 論究日本文学	6. 最初と最後の頁 77-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川崎佐知子	4. 巻 62
2. 論文標題 立命館大学図書館蔵『後水尾院御集』について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 朱	6. 最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎佐知子	4. 巻 662
2. 論文標題 立命館大学図書館蔵『後水尾院御集』の翻刻と解題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 39-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川崎佐知子	4. 巻 654
2. 論文標題 立命館大学図書館西園寺文庫蔵『新院御会部類集』の解題と翻刻	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 川崎佐知子
2. 発表標題 陽明文庫『御哥』について
3. 学会等名 和歌文学会関西七月例会 (第130回)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川崎佐知子
2. 発表標題 『応円満院殿御詠歌』について
3. 学会等名 和歌文学会五月例会 (2018年5月19日、於中央大学多摩キャンパス [東京都八王子市])
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川崎佐知子
2. 発表標題 『応円満院御詠』について
3. 学会等名 和歌文学会関西12月例会（2018年12月1日、於大阪大学豊中キャンパス [大阪府豊中市]）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 後藤康文、倉田実、久下裕利、今井久代、井上新子、萩野敦子、野村倫子、井上眞弓、鈴木泰恵、川崎佐知子、有馬義貴	4. 発行年 2019年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 272
3. 書名 狭衣物語の新世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----